

先日、テレビニュースに、タイの反政府デモの映像が流れた。激しく衝突する政府軍と反政府軍の様子を見ながら、バンコクで出会ったポンさんと、屋台でアイスクリームを売っていた青年のことを思い出した。

一昨年、タイのバンコクを訪れた際、現地でガイドについてくれたのがポンさんという日本人女性だった。タイ人の男性と結婚して三十年、ずっとバンコクで暮らしているそうだ。ツアーバスの中で席が隣になったおかげで、彼女といろいろな話をする事ができた。「主人にひと目ぼれされちゃったせいで、私の人生、狂っちゃったわよ」

ガハハハと豪快に笑うポンさん。大学時代、日本に留学していたご主人と同じクラスになり、卒業と同時にまわりの大反対を押し切って結婚したらしい。当時はタイ人が日本で就職するのは難しく、バンコクでの生活を選んだと言う。生活は不便で食事は口に合わない、初めは泣いてばかりだったそうだが、「帰るところがないんだもの、頑張るしかないじゃない」と笑う。駆け落ち同然だったようだ。

「不安だったでしょう？」と聞くと、タイに来たばかりの頃の写真を見せてくれた。寺院をバックに、色白でスレンダーな女性が微笑んでいる。この写真を「なんとなく、お守りのように」持ち歩いているそうだ。

「私は日本人なんだと思うことで、何度も崩れずに済んだのよ」
今のポンさんからは想像つかない可憐な姿に、ここに至るまでの苦労がしのばれた。波乱万丈だっただろう。実際、十年ほど前にご主人を亡くし、その後は女手一つで二人の娘を育て、ご主人の両親も養っていると言う。可憐なままではいられなかったに違いない。

突然、バスが急停車した。運転手がバンと窓を開けて怒鳴り始めた。するとポンさんもあわてて窓を開けてなにやらわめく。外をのぞくと、二人乗りのバイクが逃げるように走り去っていくところだった。聞けば、バイクの後ろに乗っていた男性がバスのサイドミラーをもぎ取ろうとしていたのだと言う。走っているバスからサイドミラーを盗もうとする、日本では考えられない行為に驚いていると、ポンさんは一転、げらげら笑い出した。

「タイは微笑みの国っていうけれど、爆笑の国でしょ？」
そしてバスの前方の壁を指差す。そこには「テレビ」が描かれたベニヤ板が貼られてあった。

「あそこにはもともと本物のテレビがあったの。でも、ある日すっぱり盗まれてしまって、会社に新しいテレビを手配するよう頼んだら、あの絵が貼られたってわけ。ジョークじゃないのよ、真面目なの」

その「テレビ」にはチャンネルのほか、画面には男女が向き合っているシーンまでもが詳細に描かれている。漫画のような話にあっけにとられていると、今度は運転手の脇を指差す。そこには小さな金色の仏像が置かれ、横にいくつもの美しい花飾りが添えてあった。仏教行事の一環としてのお供えらしい。

「タイ人っていい加減かと思いきや、ものすごく信心深くて、仏陀とお坊さんにはきちんとして敬意を払うの。彼らはいつも真面目なのよ」

そう話すポンさんの表情は柔らかい。なんだかんだ言いながらもタイのことが好きなのだろう。悪口も、身内だからこそ言える憎まれ口のように感じられた。思わず、聞いてみたかったことが口をついた。

「タイに来たこと、後悔しました？」
すると、彼女は即答した。

「何度もしたわよ。でもね、その反対もいっぱいあったの。それに、日本で暮らしていたら、こんなには一生懸命に生きられなかった。だから、良かったんじゃない？」

その「一生懸命」という言葉を聞いて、二十年ほど前、初めてタイを訪れたときに出会った青年のことが思い浮かんだ。

当時、私は社会人二年目。日本は世界一の経済大国と言われ、まだバブルに浮かれていた頃だ。

バンコクの大通りにはドアがとれたままの車が堂々と走り、バスにはこぼれんばかりの人が乗り、それらの間をバイクやトゥクトゥクと呼ばれる人力車がすり抜けて行く。路地裏には屋台が並び、焼き飯や焼きそば、ジュースまでもがビニール袋に入れて売られていた。ジュースは一袋十円ほど、大ぶりで脂の乗った焼き鳥は一本五十円もしない。日本では見たこともないような食べ物もたくさんあって、次々に味見をしては舌鼓を打った。人々のたくましいまでの活気にひかれ、私はいっぺんにタイが好きになった。そんな浮かれ気分であったときに会ったのが、その青年だ。

彼は通りの屋台で、勉強しながらアイスクリームを売っていた。店の前で私が立ち止まると、参考書を鞆の上に置き、冷凍ケースを開けて見せてくれる。トウモロコシが入ったアイスクリームに驚いていると、「ニホンジンデスカ」と聞いてくる。うなずくと顔がパツ

と輝き、ただどしくはあったがしっかりとした日本語で、いつか日本に留学して経済を学びたい、留学費用を得るためにアイスクリームを売っていると話した。独学とは思えないほど上手な日本語に感心していると、日本人を見つけては話しかけ、会話を磨いていると言う。

発展途上国からの留学を目指すのは一部の富裕層だと思っていた私には驚きだった。目の前にいるのはよれよれのTシャツを来て、路上で商売をしている青年だ。アイスを一つ売っても日本円で三十円もしない。留学費用がたまるまでにどのくらいかかるのだろうか。アイスをよそいながらも、日本の食生活や宗教観など、矢継ぎ早にいろいろな質問をしてくる。そして、聞かれた。

「ニホンガ、ハッテンシタノハ、ナゼデスカ」

明確な答えが出ず、口ごもった。しかし日本に憧れている青年にわからないとは言えない。頭を絞って、答えた。

「日本人の誇り」

彼は「ホコリ」とつぶやき、ノートと鉛筆を取り出して「ホコリ」という字を書いてほしいと頼んできた。使い込まれたノートにはいろいろなクセの日本語や英語が書かれ、その横にはタイ語が添えてあった。おそらく知らない単語を聞いたときにはここに書いてもらうのだろう。私が「誇り（ほこり）」と書くと、彼はその横にタイ語で何やら書き添えた。握っている鉛筆は短く、こうやって一生懸命コツコツと勉強してきたのだと思うと頭が下がった。そして、このような青年がいることに、タイの未来は明るいと感じた。

「タイって、いい国ですね」

そう言うと、彼は即座に「ノー！」と首を横に振り、世界の中では遅れているとため息をついた。さらに、ニホンジンだから、軽く「いい国」と言えるのだと語気を荒げた。

「アイ マスト スタディー フォー マイカントリー、ペリペリハード」

自分の国のために、私は一生懸命に勉強しなければならない……その真剣な彼の表情を見て、自分の中にある日本人としてのおごりを感じて反省したのだ。

ポンさんと過ごした中で、印象に残った出来事がある。最終日の昼食時、ツアー料金に含まれていた円卓を囲んでの食事がかなりのボリュームだったので、みんなでポンさんも一緒に食べましょうと誘ったのだ。私たちの食事中、彼女がいつもバスの中でパンをかじっていたのを知っていたからだ。しかし、彼女は即座に断ってきた。それがルールだから

と。ツアー客のひとりが笑った。

「ここは日本じゃないんだから、タイスタイルでいいかげんにいこうよ」

他の客たちも笑い、みんなでもう一度誘ったが、ポンさんは再び断り、そのままさつと出て行った。その背中を見ながら私は複雑な気持ちになった。ツアー客のあの発言があった瞬間、ポンさんの顔は明らかに引きつっていた。きつと不快だったに違いない。彼女にとってはタイも自分の国のはず。たとえ自分はタイのことを悪く言ったとしても、日本人の観光客には言われなくなかったのではないか。この国は彼女にとっては身内なのだから。じつはあのとき、ポンさんの顔を見るまで私も笑いかけていた。自分の中にある日本人としてのおごりを感じ、二十年前のあの青年との会話を思い出した。そして、彼女のきつぱりと断った態度に、タイ人と結婚してタイで一生懸命に暮らしてきた日本人としての誇りを見た気がした。

ふと、「誇り」と「おごり」との差はどこから生まれるのだろうかと考えた。そして「誇り」を持つためには、一生懸命に生きることが必要なことに気づかされた。一生懸命になれば、自分に足りないものが見えてくる、だから謙虚になれる。その足りない部分を克服していくには「誇り」が必要なのだ。

彼女の娘さんたちは今、高校生と大学生だ。大学生の娘さんは卒業したらアメリカに看護を学びに留学したいと話しているそうだ。将来が楽しみですと、と言うと、さあどうだかねえ、と笑う。そして、言った。

「どこに住んでもどんな仕事をしてもいい。ただ一生懸命に生きてほしい、それだけよ」
その生き方を実践してきた母親からの願いは、きつと娘さんに届くに違いない。

タイの暴動、今を必死に闘っている人がいる。日本という国で、日本人として平穏に暮らしている私は一生懸命に生きていだろうか、そう自分に問うている。